

# 知的障害のある生徒が記録向上を通して体育を楽しむ実践

～タブレット端末を活用したセルフモニタリングとオンライン保護者参観を通して～

○島尚平 岩切祐司 杉田葉子 澤本佳江 小笠原志乃 片山忠成 菊池恵美

（筑波大学附属大塚特別支援学校）

キーワード：知的障害，体育，タブレット端末

（目的）

現行の特別支援学校学習指導要領保健体育科では「生涯にわたる心身の健康の保持増進や豊かなスポーツライフ」を目標としている（文科省 2018）。更に、知的障害のある子どもは身体活動量が少ないとされ（Frey et al.2008），その背景には運動技能の未発達や運動経験の不足が考えられる。そこで，特別支援教育における体育授業では，「できた！」「やった！」という達成感や楽しさを味わう経験を積み重ね，生徒が生涯を通じてスポーツや運動に親しむ素地を養う必要がある。体育授業において運動の達成感や楽しさを感じる場面を考えると①記録が向上した時，②頑張り認められた時の2つが考えられる。

記録の向上においては，運動技能の向上が必要である。知的障害のある生徒の運動技能については，タブレット端末で動画を撮影し，生徒にフィードバックすることで記録が向上するという報告もあり（水内 2018），動画等を活用したセルフモニタリングが有効だと考えられる。本実践では動画を活用したセルフモニタリングに加えて，運動時に注目するポイントが明確になるようポイントチェックシートを併用した。

頑張りを認めるという点では，生徒が真剣に運動に取り組むための環境設定や，頑張り言葉を言葉に加えて，形あるもの（トークン）で認めていく必要があると考えられる。本実践では，生徒のモチベーションを高める環境設定としてオンライン保護者参観も兼ねた体育的行事を設定した。また，生徒のモチベーションを高めるためのトークンとして，記録賞とメダルを用意し，行事の最後に表彰する時間を設けた。

本報告では，動画とチェックシートを用いたセルフモニタリングを行った運動指導と，体育的行事とトークンを用いた環境設定が生徒の記録向上にどのような影響を与えたか，生徒の競技記録をもとに考察することを目的とする。

（方法）

【対象】A 知的障害特別支援学校中学部 1～3 年生18 名

【実施期間】202X 年 10 月～202X 年 12 月

【活動内容】陸上競技（30m 走，ジャバリックスロー，立ち幅跳び）

Table1 単元計画

時数	目標	活動内容
1・2	全種目を体験しよう！	種目の確認、全種目の記録測定
3～6	種目のポイントを意識して取り組みよう！	種目毎のポイント確認、ポイントを踏まえた練習。動画での映像確認。
7～10	1回目の記録を超えよう！	自分の記録を意識して、自己ベストを更新する。動画での映像確認。
11・12	自己ベストを出そう！	大塚オリンピックで、出場種目に取り組む。
13・14	出場種目を振り返ろう！	出場した種目のポイントを再確認し、友達と共有する。

※時数について：本校では週 1 回の体育授業で 2 時間連続して体育の時間をとっている。

Table2 授業の流れ

	活動内容	指導上の配慮事項
導入 (20 分)	・あいさつ、本時の確認をする。 ・ウォーミングアップ。 (ラジオ体操・補助体操)	・ホワイトボード、掲示物を活用し、視覚的にわかりやすく本時の内容を提示する。
展開 (60 分)	・各種目の活動場所を別れ、種目のポイントを確認する。 ・1 回目の試技に取り組む。 ・映像の確認、振り返りをする。 ※ ・2 回目の試技に取り組む。 ・映像の確認、振り返りをする。 ・種目変更。(※を繰り返す)	・ポイントチェック表を活用し、生徒と各種目のポイントを確認する ・タブレット端末で撮影する。映像を見ながら、チェックポイントと比較し、自分で評価できるよう支援する。 ・振り返りを活かして、取り組めるように言葉掛け等をする。
まとめ (20 分)	・整理体操、振り返り	・頑張っていた生徒を指名し、全体の前で称賛する。

【分析方法】単元で初めて種目に取り組んだ記録(BL)とタブレット端末とチェックシートを用いて指導を行なった 3～10 時間目のベスト記録(R1)，11・12 時間目の体育的行事のベスト記録(R2)を比較した。行事当日，生徒は設定した3種目の中から最も記録が伸びていた1種目のみに取り組んだ為，分析で使用した記録は，生徒が行事で参加した種目とした。

（倫理）本発表に関し当該校の研究倫理委員会の承諾を得た。

（結果）

3 種目それぞれの記録の推移をグラフに示した。どの生徒も BL 時よりも R1 時に記録が向上していた。また，R1 時の記録よりも R2 時の記録が向上している生徒が 9 名いた。

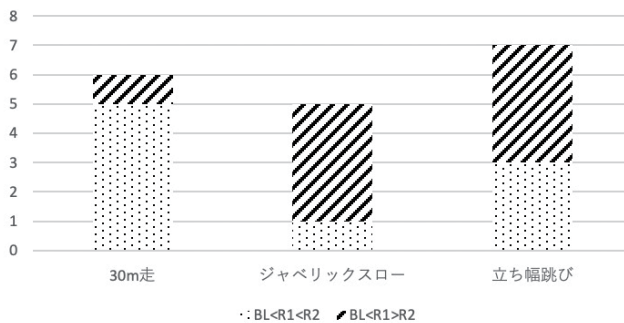


Figure1 種目毎の記録の推移

（考察）

R1 時に全ての生徒の記録が向上した点については，生徒の運動技能の向上があったと考えられ，動画とチェックシートを活用したセルフモニタリングの有効性が確認できた。試技後の振り返りを通して，自分の体の動きや改善点が明確になり，体の動かし方を考えながら取り組む姿勢につながった。まとめの振り返りでは，生徒からポイントに関する発言があったり，体を動かしながらポイントを説明したりする場面もあり，生徒がポイントを意識しながら取り組んでいたことが伺えた。

R2 時には 18 名中 9 名の生徒の記録が更に向上していた。これは行事という特別な場面における，モチベーションの高まりが関係していると考えられた。当日はオンライン保護者参観で保護者が参観したり，他の生徒が観客として試技を見る時間を設けた為，普段の授業とは違う雰囲気の中で授業が進められた。試技の前に「うおー」と声を出す生徒や，試技の後に「よっしゃ！」とガッツポーズをする生徒もあり，生徒がいつも以上に良いモチベーションで取り組むことができていた。反対に，緊張した面持ちで取り組んでいる生徒や試技の後に首を傾げる生徒もあり，緊張からこれまでの記録を超えられなかった生徒もいた。表彰式では，賞状やメダルを授与された生徒が皆，嬉しそうな表情をしており，言葉だけでなく形ある物でも頑張りを認める重要性が再認識できた。

以上のことから，本実践においては，動画とチェックシートを用いたセルフモニタリングの有効性が確認できた。また，単元の最後に行事という形で成果発表の場を設けることで，モチベーションが高まり，記録が向上することも明らかになった。こういった実践の積み重ねが，運動を楽しむことに繋がり，それが生涯にわたる豊かなスポーツライフにつながるはずである。

(SHIMA Shohei, IWAKIRI yuji, SUGITA Yoko, SAWAMOTO Yoshie, OGASAWARA shino, KATAYAMA tananari, KIKUCHI emi)